JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	6眼のインターアクションを内包した知識の再構成プロセス―A企業内研究チームにおける研究開発活動の事例研究―
Author(s)	吉永，崇史
Citation	
Issue Date	2007-09
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/3740
Rights	
Description	Supervisor:遠山　亮子，知識科学研究科，博士

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

博士論文要旨

本論の目的は、組織的研究開発活動における個人の知識の再構成プロセスと、それを促進するマネジメントについてそれぞれ明らかにすることである。本論の鍵概念である知識の再構成のプロセスは、準拠枠の変容（Merirow, 2000）と概念体系の再結合の相互作用として規定されるプロセスと定義される。

本論では、野中等（Nonaka & Takeuchi, 1995; 野中・紺野, 2003; Nonaka & Toyama, 2003, 2005）による組織的知識創造理論、林（1999, 2001, 2004）による 6 眼モデル、Yoshinaga & Toyama（2005, 2006）による知識の再構成プロセスモデルを土台とした分析枠組みを構築した。その結果、主体・客体眼、過去・未来眼、アナログ・デジタル眼の 3 つのインターアクションが働く対話的実践段階と、それに先立つ問題への気づき段階、ソリューションの開発段階から構成され、高次の段階が低次のそれを内包する入れ子状構造を持った知識の再構成プロセスが提示された。

本分析枠組みを検証する目的で、本研究チームの設立当初から 2 年 4 カ月に亘るフィールドワーク調査によって得られたチーム・メンバー10 人に実施した計 28 のインタビュー記録にもとづき、質的データ分析手法の 1 つである木下（1999, 2003）による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行い、その結果を考察したところ、以下の諸知見が得られた。

知識の再構成プロセスは、問題への気づき、ソリューションの開発、ソリューションについての対話的実践、の 3 つの段階から構成され、その全体構造は入れ子状になっている。即ち、第 2 段階であるソリューションの開発は第 1 段階である問題への気づきを含み、第 3 段階であるソリューションについての対話的実践は第 1 段階である問題への気づき、および第 2 段階であるソリューションの開発を含んだ活動システムとして機能する。

知識の再構成要素は、6 つの半球（意識界）―主体、客体、過去、未来、アナログ、デジタル―の変容に対応して概念化されている。具体的には、主体境界の再設定、葛藤・矛盾、視野の拡がり、技術概念の新結合、信条の変化の 5 つである。これらの要素は、知識の再構成それ自体を表す概念でもあり、他の知識の再構成要素のきっかけ、ないしは結果として機能する。

第 1 段階（問題への気づき）では主体・客体眼インターアクションと過去・未来眼インターアクションが働いている。第 1 段階で出現する知識の再構成要素は、主体境界の再設定、葛藤・矛盾の 2 つである。この 3 つの要素には、それぞれを促進されるマネジメントを対応付けることができる。具体的には、主体境界の再設定には、異質な情報共有、ロードマップ策定、組織・連携体制づくり、技術評価の 4 つのマネジメントが対応する。一方、葛藤と矛盾には、混乱を誘うマネジメンを対応付けることができる。

第 2 段階（ソリューションの開発）では、過去・未来眼インターアクションと主体・客体眼インターアクションが働いている。第 2 段階においても、主体境界の再設定、葛藤・矛盾は引き続き現れるが、第 2 段階に移行することで、新たに、視野の拡がり、技術概念の新結合、信条の変化の 3 つの知識の再構成要素が出現する。視野の拡がりには、抽象的な方向付けのマネジメントが対応付けられ、技術概念の新結合には異質な情報共有のマネジメントが対応付けられている。一方、信条の変化に直接対応するマネジメントを確認することはできなかったが、信条の変化は、主体境界の再設定、葛藤、矛盾、技術概念の新結合との間に相互影響関係があることが確認できた。従って、それらの 4 つの知識の再構成要素に対応するマネジメント―異質な情報の共有、ロードマップ策定、組織・連携体制づくり、技術評価、混乱を誘う、の 5 つ―によって、個人の信条の変化に間接的に介入することができることが示唆される。

第 3 段階（ソリューションについての対話的実践）では、主体・客体眼インターアクション、過去・未来眼インターアクション及びアナログ・デジタル眼インターアクションが働いている。アナログ・デジタル眼インターアクションが働いていることが低次の段階との最大の違いである。第 3 段階において新たに出現する知識の再構成要素はないが、入れ子状構造により、第 2 段階までに働いていた 6 つの知識の再構成要素全てが引き続き現れる。この段階ではじめて有効に働く 4 つの視座の働きは対話的実践促進眼として概念化され、それらは知識の再構成要素に影響を及ぼしていることが確認された。1 つ目の A 研究チーム同僚眼の働きは、主体の葛藤・矛盾、信条の変化に影響を及ぼしている。この視座の働きのみが、知識の再構成を促進するマネジメント―異質な情報の共有および視野を拡げる―に対応している。主体眼の停止の働きは、主体の視野の拡がりに影響を及ぼしている。3 つ目の未来半球（意識界）における過去眼の働きは、視野の拡がりと技術概念の新結合に影響を及ぼしている。4 つ目のデジタル眼停止は、葛藤、技術概念の新結合、信条の変化に影響を及ぼしている。

以上